古ベトナム語における受身表現
—16世紀漢文−ベトナム語対訳資料『新編傳奇漫録』を通して—

鷲澤　拓也

要　旨

16 世紀末にベトナムで書かれた漢文と古ベトナム語の対訳資料『新編傳奇漫録』に表れる受身表現を研究する。中でも現代ベトナム語で受身を表すために用いられる được や bị のような助動詞的な語を用いた表現に焦点を当てる。結果、16 世紀のベトナム語では受身は主に phải と được によって表現されたが、頻度は多くなく、特に動作主を伴う表現は少ないことがわかった。助動詞でなく一般動詞としての用法も多く見られ、現代語ほど文法化されていなかった。また、「見る」を表す thấy が漢文の受身の助動詞「見」を訳すためにも用いられたが、定着していた受身表現ではなく、漢文からの直訳の用法と考えられる。受身表現の確立までの初めの段階と言える。

0．はじめに

孤立語であり語形変化や接辞のないベトナム語では、文法の表示は語順と文法機能語によりなされる。このうちで文法機能語はより把握が容易であり、文法史の解明の大きな手掛かりとなる。

ベトナム語を初めとするアジアの諸言語では、品詞や態など、英語やフランス語などの西洋語で明示的に表される文法事項が、体系的に表されないことがしばしば見られる。ベトナム語が西洋諸言語と接触するようになってから、これらの文法事項が明示的に表される頻度が増えたことが近年の研究で指摘されており、文法史、広く見れば言語の変化に関する深い示唆を伴った研究対象となっている。

本稿では、そのような背景のもと、16 世紀のベトナム語の資料を対象に、文法機能語を使って「受身」がどのように表されていたかを調べる。

１．現代ベトナム語における受身表現

現代ベトナム語において、受身は được や bị によって以下のように表される。

(1) Nó được khen.
彼 得る 褒める
“彼は褒められた。”

(2) Nó bị đánh.
彼 被る 殴る
“彼は殴られた。”

(3) Nó được bố khen.
彼 得る 父 褒める
“彼は父に褒められた。”

(4) Nó bị bố đánh.
彼 被る 父 殴る
“彼は父に殴られた。”

Được は本来、「得る」を表す動詞であり、動詞句・形容詞句の前に置かれることで「～するという恩恵を蒙る」「～することを許される」を表す。なお、動詞に後置されると可能を表すようになり、区別が必要である。また bị は本来「被る」を表す動詞[1]であり、喜ばしくないまたは不利益になる動作を被ることを表すである。（Hoàng Thị Tuyền Linh 2011）これらが用いられるのは以下の例に見るように、必ずしも受身の場合に限らない。

(5) Tôi bị ngã.
私 被る 倒れる
“私は倒れてしまった。”

(6) Tôi bị ốm
私 被る 病気だ
“私は病気です。”

[1] Bị は「被」に対応する漢越語である。漢越語とは、古典漢語から体系的に借用された語で、日本語で漢字を音読みする語に相当する。

(7) Tôi được nghỉ hai ngày.
私 得る 休む 二 日
“私は 2 日の休みをもらった。
（休むことを許された）”

(8) Tôi không được khỏe.
私 否定 得る 元気だ
“私は元気ではありません。”

(9) Rất vui được gặp anh.
とても 嬉しい 得る 会う あなた
“お会いできて（会うことを許されて/会う機会に恵まれて）とても嬉しいです。”

(3)、(4)のような文は、動作主を伴う動詞句が được や bị の後に置かれて、「（動作主）が…するのを蒙る」という意味となる。しかし、この動作主を伴う構文が口語で用いられることは比較的稀である。[2]

２．分析対象資料について

『新編傳奇漫録増補解音集註（*Tân biên Truyền kỳ mạn lục tăng bổ giải âm tập chú*）』（以下、『新編傳奇漫録』）は、16 世紀[3]に漢文で書かれた伝奇（幽霊、妖怪、霊界などを扱う）の説話集『傳奇漫録』に対して、古ベトナム語の訳文が割注で書かれた対訳資料である。成立は 16 世紀末と推定される。漢字を変形・転用して作られたベトナムの固有文字チュノムで書かれている。4 巻からなり、5 話で 1 巻を成す。原作者は阮嶼（げんよ、Nguyễn Dữ）、翻訳者は阮世儀（Nguyễn Thế Nghi）とされる。原文は漢文で書かれているが、場面や登場人物はベトナムのものである。Nguyễn Quang Hồng (2001) に 1774 年版の刊本のコピーと、チュノム訳文部分のラテン文字翻字がある。現代ベトナム語訳は、Ngô Văn Triện が 1901

[2] 口語では動作主を伴う場合は通常の能動態と同様の表現がなされ、動作対象を背景化する場合に cho（動詞「与える」、補助動詞「～してあげる」、前置詞「～のために」）が動詞の後に付けられる場合もある。

[3] 厳密には、1547 年あるいはそこから遡って数年乃至数十年の間の時点と考えられる（川本 1999:9）。

年から 1947 年にかけて翻訳したものが広く知られており、Hoàng Đức Quảng et al. (1994) にフランス語訳と共に掲載されている。

ラテン文字表記が考案される前にベトナム語（チュノム）で書かれた資料のうち、韻文でないものとして貴重な資料であるが、原文の漢文と逐語的に対応しているという特徴があり、日本の漢文訓読体と同様、語の用法が漢文と酷似している場合があることや、より古い形が残っていると思われるものもあることに、注意を要する。

ベトナム語は、漢文と同じく孤立語であり、基本語順が SVO であるが、修飾語は漢文と異なり被修飾語に後置される。『新編傳奇漫録』では、漢文の一語一語に対応する語をあて、修飾－被修飾の前後関係を変えるという逐語的な訳がなされる。ただし、固有名詞の前に「人」、「国」といった名詞を付したり、原文にない文法機能語を訳で追加したりすることも頻繁に見られる。

３.『新編傳奇漫録』の中の受身表現に関する先行研究

Trần Trọng Dương (2004) は、『新編傳奇漫録』の全 20 話中 5 話において、漢文の受身表現が古ベトナム語訳文でどのように訳されているかを分析した。その分析結果に基づき、受身表現の原文（漢文）と訳文（古ベトナム語）の対応関係は、対象範囲中の頻度とともに以下のようにまとめられる。

①「見」＋動詞　→　thấy＋動詞　：6 回
②「見」＋動詞　→　thấy＋名詞　：1 回
③「見」＋動詞　→　thấy を使った意訳　：1 回
④「見」＋動詞　→　xem を使った意訳　：1 回
⑤「見」＋動詞＋「於」＋動作主　→　thấy＋動詞＋chưng＋動作主　：1 回
⑥「為」＋動作主＋「所」＋動詞　→　phải＋動作主＋thửa＋動詞　：8 回
⑦「為」＋動詞　→　phải＋動作主＋動詞　：1 回

⑧ 動作主＋「所」＋動詞　→　動作主＋thửa＋動詞　：2 回
⑨「被」＋動詞　→　phải＋動作主＋動詞　：1 回
⑩「被」＋動作主＋動詞　→　phải＋動作主＋動詞　：1 回
⑪ 動作対象＋動詞（受身標示なし）→ 動作対象＋動作主＋動詞　：1 回
⑫ 動作対象＋動詞（受身標示なし）→ 動詞＋動作対象（能動態で訳）　：8 回
⑬ 動作対象＋動詞（受身標示なし）→ 動作対象＋phải＋動詞　：3 回
⑭ 動作対象＋動詞（受身標示なし）→ 動作対象＋動詞　：3 回
⑮ 動作対象＋動詞（受身標示なし）→ 動作対象＋được＋動詞　：1 回
⑯「遭」＋動作主＋動詞　→　gặp＋動作主＋動詞　：1 回
⑰「遭」＋動詞　→　phải＋動詞　：1 回
⑱「蒙」＋動詞　→　ơn＋動詞　：1 回
⑲「負」＋動詞　→　chịu＋節　：1 回
⑳ 動詞＋「於」＋動作主　→　動詞＋chưng＋動作主　：2 回

本稿では、1 巻における受身表現を網羅的に説明したこの研究を土台にし、研究対象範囲を全巻に広げつつ、16 世紀のベトナム語における文法機能語を用いた受身表現を調べる。中でも、1. で述べた現代ベトナム語との比較のため、助動詞的に用いられている được、phải、thấy を用いた表現に焦点を当てる。Ơn（「恩」）、gặp（「会う」）、chịu（「受ける」、「負う」）は、頻度も少なく、実質的な意味を持つ内容語と捉えることができるため、本研究では対象外とする。

関連する先行研究として、Đinh Văn Đức (2018:522-524) も挙げる。17 世紀における được、bị、phải について、主にラテン文字で書かれたキリスト教関係の資料を対象に研究している。それによると、17 世紀においては bị がごく稀に用いられ、được と phải との対立が現代語の được と bị との対立に相当する。また、được や phải は本動詞としての用法も多く見られる。本研究では 16 世紀における được やphải を用いた受身表現の様相を明らかにすることで、このような文法変化の過

程に関する研究に新たな考察を加える。

４．ベトナム語訳文での受身を表す助動詞の用法

４．１．Phải の用法と訳のパターン

3．で示したことからわかるように、『新編傳奇漫録』のベトナム語文において受身表現で最も多く用いられる語は phải である。『新編傳奇漫録』の中で phải は大まかに言うと「正しい」[4]と「被る」の 2 つの意味がある。「正しい」の意味では 65 回、「被る」の意味では 71 回使われている。このうち、phải が「被る」の意味で助動詞的に用いられている場合を、原文の漢文での対応する語ごとにまとめると、以下のようになる。

４．１．１．「為」が phải に訳される場合

3．で示した Trần Trọng Dương (2004) の研究結果と同様、『新編傳奇漫録』の受身表現で最も多いパターンは、「為」が phải に訳される場合である。構文別に以下のように分けられ、『新編傳奇漫録』全巻における頻度は以下のようになる。なお、助動詞としての「為」はすべて phải に訳される。すなわち、助動詞「為」の用例はすべて以下に含まれている。

[4] 漢文の動詞「然」（しかり）の訳語等。

・「為」+ 動詞　→　phải + 動詞　：1 回

(10) 漢: 凡可充口腹者悉為攘去　<III:35a:6>[5]

［凡そ口腹（こうふく）を充たすべき者は悉く攘（ぬす）み去らる］

喃: 係　物　可　𢦏　苔　咽　胞　意　調　沛　濫　𢧵

Hễ　vật　khả　nên　đầy　miệng　dạ　ấy,　đều　phải　trôm　đi.

凡そ[6]　物　可能な　成る　満ちる　口　腹　その[7]　皆　被る　盗む　行く

‘食べることができるものはすべて盗み去られてしまった。’

・「為」+ 動作主 + 動詞　→　phải + 動作主 + 動詞　：4 回[8]

(11) 漢: 妾既為夫兒不容［妾既に夫兒に容れざらる］<IV:11a:1>

喃: 妾　𠀧　沛　𡚬　昆　拯　容

thiếp　đã　phải　chồng　con　chẳng　dung

妾(私)　既に　被る　夫　子供　否定　容れる

‘私は既に夫と子に見棄てられてしまった。’

・「為」+ 動詞　→　phải + 動作主 + 動詞　：1 回

(12) 漢: 有頭目者則為淫殺［頭目有る者は則ち淫殺せらる］<III:1b:3>

喃: 埃　固　頭　𩣡　意　時　沛　奴　淫　折

ai　có　đầu　mặt　ấy,　thời　phải　nó　dâm　giết

誰　ある　頭　顔　その　すなわち[9]　被る　彼/彼女　淫らな　殺す

‘地位のある者は（その悪霊に）（酒に）溺れ殺されてしまう。’

---

[5] 「漢」は漢文の原文（便宜的に日本式訓読を付す）、「喃」はチュノムによる古ベトナム語の訳文、その次の行に、現代正書法に準じたラテン文字翻字、グロス、和訳。「< >」の中は順に、巻数（I～IV）、頁数（a は表、b は裏）、行数で、例文の最初の漢字の箇所を表す。

[6] 現代語では「～するといつも」といった意味。対訳文献では「凡」「夫」等の訳語で頻繁に用いられる。

[7] 指示代名詞だが主題を表す機能もあり、「者」の訳語で頻繁に用いられる。

[8] (11)以外の箇所は、<I:42a:3>、<I:51a:7>、<I:54a:4>。

[9] 「則」等と機械的に対応する訳語。

・「為」＋ 動作主 ＋「所」＋ 動詞 → phải＋ 動作主 ＋thửa＋ 動詞 ：23 回

(13) 漢：我<u>為兵戈所礙</u>［我兵戈（へいくぁ）の礙（さまた）ぐる所と為る］
<I:21a:6>

喃：仲逵 沛 役 銅 博 所 垠

Trọng Quỳ <u>phải việc đòng bác thửa ngăn</u>

仲逵 受身 こと 戈 薙刀 THUA 阻む

‘私（仲逵）は、武器（戦）によって道を阻まれてしまった。’

「為」は通常、「する」を意味するlàmで訳されるため、phảiによる訳は受身の意識の表れといえる。ただし、大多数においては「所」と機械的に対応するthửa[10] が入っている。“phải...thửa...” という構文はベトナム語に備わっていたものではなく、逐語訳により固定化されたものである可能性が高い。

４．１．２．「被」がphảiに訳される場合

「為」の次に phải に対応する語として多いのは、「被」である。構文別に以下のように分けられ、『新編傳奇漫録』全巻における頻度は以下のようになる。なお、助動詞としての「被」はすべてphảiに訳される。すなわち、助動詞「被」の用例はすべて以下に含まれている。

[10] 『新編傳奇漫録』における「所」と thửa の用法については、Washizawa (2018) にて述べられている。

・「被」+ 動詞　→　phải + 動詞　：4 回[11]

(14) 漢: 或生前免禍而死後被刑［或は生前禍を免れて死後刑せらる］
<IV:25a:1>

喃: 或　課　𣍐　𩞁　塊　禍　麻　欺　托　𩞁　沛　刑
hoặc thuở sống trước khỏi họa, mà khi thác sau phải hình
或は 時期 生きる 前 逃れる 災い しかして[12] 時 死ぬ 後 被る 罰する
‘ある人は、生前災いを免れて、死後に罰せられる。’

・「被」+ 動作主 + 動詞　→　phải + 動作主 + 動詞　：3 回[13]

(15) 漢: 被彼攻驅［彼に攻め驅（か）らる］<II:41b:4>

喃: 沛　𠊛　箕　打　𨑮
Phải đứa kia đánh đuổi.
受身 やつ あの 打つ 追い出す
‘彼に攻められて追い出されてしまった。’

・「被」+ 動詞　→　phải + 動作主 + 動詞　：1 回

(16) 漢: 有貨財者則被潛攘［貨財有る者は則ち潛かに攘（ぬす）まる］
<III:1b:4>

喃: 埃　固　貼改　意　時　沛　奴　𣸣　𢤱
ai có của cải ấy, thời phải nó trộm lấy
誰 ある 財産 その すなわち 被る 彼/彼女 盗む/ひそかに 取る
‘財産のある者は、（その悪霊に）こっそり盗み取られてしまう。’

---

[11] (14)以外の箇所は、<III:36a:1>、<IV:10a:7>、<IV:17a:3>
[12] 「而」に機械的に対応する訳語。
[13] (15)以外の箇所は、<III:40a:5>、<IV:53a:4>

「被」が動詞として用いられる場合にも phải で訳される箇所があることから[14]、phải には「被る」の意味があることがわかる。現代ベトナム語の bị と同様に用いられていることがわかるが、用例が少ないためもあり、16 世紀のベトナム語で頻繁に用いられていたか、漢文からの逐語訳の影響か、これだけからは判断できない。

４．１．３．「得」「見」「遭」「虜」が phải に訳される場合

助動詞「得」「見」および動詞「遭」「虜」が phải に訳されることが、それぞれ 1 回ずつある。「得」と「見」の箇所は以下の通り。どちらも動作主を伴わない受身文で訳されていると言える。[15]

(17) 漢: 脱以此<u>得責</u>甘心瞑目矣 <IV:66b:7>

［脱（も）し此を以て責むるを得るも甘心して瞑目す］

喃: 油	衹	調	意	沛	責
dẫu	lấy	điều	ấy	<u>phải</u>	<u>trách</u>,
たとえ～でも	取る[16]	こと	その	被る	責める

甘	悉	眦	翻	丕
cam	lòng	nhắm	mắt	vậy
甘んじる	心	閉じる	目	語気詞

‘たとえこのことで責められたとしても、満足して死ねる。’

[14] <II:23a:7>（「被酒」→ phải rượu (rượu: 酒)）、<II:41a:6>、<IV:16a:7>。
[15] 「遭」: <III:4b:4>。「虜」: <IV:34b:7>。「遭」の箇所は動作主を伴わない受身、「虜」の箇所は動作主を伴う受身文で訳されているように見受けられる。
[16] 動詞だが、前置詞「以」に対応する訳語。

(18) 漢: 狂柯見贈於斧斤［狂柯斧斤に贈らる］<III:56b:5>

喃: 梗	槐	沛	查	蒸	鐐	鈽
cành	dại	phải	tra	chưng	rìu	búa
枝	狂った	被る	取り調べる	～に	斧	斧

‘狂った枝が斧で駆除されてしまった。’

４．１．４．原文に対応する語がなく、訳文で phải が追加される場合

Trần Trọng Dương (2004) ではあまり挙げられていないが、『新編傳奇漫録』中の phải の用例で「為」の訳語の次に多いのが、原文に対応する語がないパターンである。次のような場合がある。

・動詞　→　phải + 動詞　: 19 回

(19) 漢: 獻忠者未言而已戮［忠を獻ずる者、未だ言はずして已に戮（ころ）さる］<III:29b5>

喃: 几	登	例	証	意	賭	吶	麻	缶	沛	折
kẻ	dâng	lời	ngay	ấy,	chửa	nói	mà	đã	phải	giết
者	捧げる	言葉	正直な	その	未だ	言う	しかして	すでに	被る	殺す

‘正直な進言をした人は、言い終わる前に殺された。’

・動作主 + 動詞　→　phải + 動作主 + 動詞　: 5 回[17]

(20) 漢: 物誘牽之［物之を誘ひ牽く］<I:80b:4>

喃: 沛	物	誘	揉	蒂
phải	vật	du	dắt	đấy
被る	物	誘う	引っ張る	それ[18]

‘（彼は）物（欲）に誘惑された。’

[17] (20)以外の箇所は、<I:44a:6>、<II:12a:1>、<III:34b:7>、<IV:62b:7>
[18] 中称代名詞で、代名詞「之」は大部分この語で訳される。（鷲澤 2016）

中には、phải を追加するだけでなく、語順を変えることで、能動態を受動態に変えて訳している箇所もある。

(21) 漢: 懼頻打鴨［頻（しき）りに鴨を打つを懼る］<III:50a:4>

喃: 戻	能	欺	丐	越鳥	沛	打
lệ	năng	khi	cái	vịt	phải	đánh
恐れる	頻繁に	時	類別詞	鴨	被る	打つ

‘しきりに鴨を打ってしまう（鴨が打たれてしまう）ことを恐れています。’

これらの例を見ると、受身を表す助動詞としてのphảiの用法は、16世紀のベトナム語においてある程度定着しており、動作主を伴う表現も、頻度が多いとは言えないが自然に用いられていたことが推測できる。

４．１．５．Phải の 16 世紀以降の用法

Phải は「正しい」の意味と共に「～しなければならない」の意味でも用いられるようになり、17 世紀以降は、これらの意味での用法が拡大するとともに、受身での用法は狭まり、受身を表す語はbị に取って代わるようになった (Đinh Văn Đức 2018:522-524[19])。[20] しかし、bị が頻繁に用いられるようになるのは19 世紀になってからである。（鷲澤 2019）

４．２．Được の用法と訳のパターン

Được は「得る」「勝つ」の意味の動詞として、「得」「穫」「勝」等の訳語として用いられている。『新編傳奇漫録』で được は合わせて 185 回用いられている。

[19] Bị の使用の増加の原因の 1 つは、phải の多義性の回避だと述べている。
[20] 現代語に残る phải の受身関連の用法としては、動詞に後置して「(望まないのに) ～させられる」「～する羽目になる」を表すという用法がある。

助動詞的に用いられる được は、現代語と同様、本動詞に前置される場合と後置される場合がある。後置される場合は現代語と同様に総じて可能を表している。本稿では現代語での được を用いた受身表現との比較のため、動詞に前置される場合を扱う。

「得」や「獲」が他の動詞の前に置かれて助動詞となる時も、この「得」や「獲」は được で訳されるが、「得」や「獲」の意味は可能や願望（ぜひとも～したい）であって、受身の用法はない。より典型的な受身の用法の được を見るため、まず原文に対応する語がない場合を取り上げる。

４．２．１．原文に対応する語がなく、訳文で được が追加されている場合

漢文の原文に対応する語がなく、訳文で動詞の前に được が追加されている箇所が『新編傳奇漫録』全巻で 20 箇所あり、その場合総じて受身や、恩恵の享受、許可（「～することを許される」「～させてもらう」）を表している。語彙的、語用的な要因により、漢文では受身表現が不要でもベトナム語では必要もしくはあった方が自然といった場合に、được を追加して訳していると考えられる。Được と本動詞との間に動作主が入らない場合が大多数（19 回）である。

(22) 漢：以父蔭補僊遊縣宰［父の蔭を以て僊遊縣の宰に補せらる］<II:48a:2>

喃：	祂	職	蔭	吒	特	補	㝵	官	宰	縣	僊遊
	lấy	chức	ấm	cha	được	bổ	làm	quan	tể	huyện	Tiên Du.
	取る	職	蔭	父	得る	任命する	なる	官僚	宰	県	僊遊

‘父の蔭によって僊遊県の宰に任命された。’

(23) 漢: 德義行而無不<u>樹</u>之國［德義行ひて樹（た）てざるの國無し］<I:5a:1>

喃: 德 義 㗂 麻
Đúc nghĩa làm mà
徳 義 する しかして

拯 固 蒸 渚 芾 羅 拯 特 𢿱 鄧
chẳng có chưng nước nào là chẳng <u>được gây dựng</u>
否定 ある ～の[21] 国 どの コピュラ 否定 得る 生み出す 立てる
‘徳と義で行って打ち立てられない国はない。’

原文にない動作主を追加し、được と動詞との間に入れるパターンが、次の 1 回のみある。

(24) 漢: 非處盡其倫而能<u>盡其節</u>乎 <I:12b:5>
［其の倫を處（しょ）し盡（つ）くすに非ずして能（よ）く其の節を盡くさんや］

喃: 油 拯 處 歇 所 等
dầu chẳng xử hết thửa đấng,
もし 否定 処する 尽くす その 人の理

麻 咍 特 𠸄 歇 所 節 咁
mà hay <u>được vơ hết thửa tiết</u> ru
しかして できる 得る 妻 尽くす その 節 語気詞
‘（王が）道徳を行い尽くしたのでなかったなら、（妻が）貞操を尽くせただろうか。’

[21] 「之」に機械的に対応する語。鷲澤（2016）で論じている。

Phải の場合と同様、原文の能動態を訳文で受動態に変えている箇所もある。

(25) 漢: 脱非繡闥龍姫［脱（も）し繡闥の龍姫に非ざれば］<I:39a:3>

喃: 油	拯	娘	姫	特	腰	鼬	翟	錦
dẫu	chẳng	nàng	cơ	được	yêu	trong	cửa	gấm
もし	否定	娘	姫	得る	愛する	中	門	錦

‘美しく飾られた部屋に住む、寵愛を受けた姫でないならば’

特に動作主を伴わない受身表現に関しては、được も phải と同程度に用いらえていたと言える。

４．２．２.「得」、「獲」が được に訳される場合

『新編傳奇漫録』で「得」や「獲」が動詞に前置して可能を表す場合、ベトナム語訳文でも được が動詞に前置されて訳されている（合計 25 回)。4.2.1.に記したように、16 世紀のベトナム語においても現代と同様に動詞の前後によって異なる用法を持っているため、可能の意味を受身等を表す構文で訳しているのは、動詞に前置する được の用法を拡大させて、訳語として用いたものであると考えられる。[22]

４．３．Thấy の用法と訳のパターン

Thấy は「見る」を表す動詞で、「見」「観」等の訳語として『新編傳奇漫録』全巻で合計 207 回用いられている。受身の助動詞「見」は、以下のような訳のパターンがある。

[22] 例：得居此（ここにいることができる）→ được ở đấy（ここにいることを許されている）<II:75b:7>、<II:76a:8>、請得正言（ぜひともはっきりと言いたい）→ xin được bày lời ngay（はっきりと言わせていただきたい）<I:7b:6>

・「見」+ 動詞 → thấy + 動詞 : 21 回

(26) 漢: 言雖不見聽甚敬重之［言聽かれずと雖も、甚だ之を敬重す］<I:16a:5>

喃: 例 雖 拯 体 暄 仍 極 敬你 蒂

Lời tuy chẳng thấy nghe, nhưng cực kính nể đấy

言葉 ～と雖も 否定 見る 聞く しかし 極めて 畏敬の念を持つ それ

‘言葉は聞かれなかったが、非常に彼女を敬い重んじた。’

・「見」+ 動詞 → thấy + 名詞 : 2 回

(27) 漢: 不敢以雲雨見困［雲雨を以て敢へて困（くる）しめられず］<I:62a:6>

喃: 拯 敢 衂 事 霎 湄 体 挨 害 饒

chẳng dám lấy sự mây mưa thấy nỗi hại nhau

否定 敢えて～する 取る 事 雲 雨 見る 名詞化 害する 互いに

‘雲や雨にも苦しめられる（困る）ことはないだろう。’

(28) 漢: 嚴堂以直言見忌［嚴堂直言を以て忌（ねた）まる］<I:16b:7>

喃: 吒 衂 例 儘 体 挨 慳 嗒

cha lấy lời thẳng thấy nỗi ghen ghét

父 取る 言葉 真っ直ぐ 見る 思い 妬む 嫌う

‘お父様は、正直に話す性格のため、妬み嫌われてしまった。’

・「見」+ 動詞 +「於」+ 動作主 → thấy + chưng[23] + 動作主 + 動詞 ：1 回

(29) 漢: 然卒見斃於漢［然るに卒（つひ）に漢に斃（たふ）さる］<I:5a:5>

喃: 雙 蘇 吏 体 蒸 茹 漢 折

Song sau lại thấy chưng nhà Hán giết.

しかし 後 逆に 見る ～に 王朝 漢 殺す

‘しかし結局、漢に倒されてしまった。’

・「見」+ 動詞 → thấy を使った意訳

(30) 漢: 殷勤見拒［殷勤（いんぎん）拒まる］<III:4a:1>

喃: 体 挨 意 敢 擦

thấy nỗi ấy dám chống

見る 思い その 敢えて～する 拒む

‘あなたとの情意は拒まれました。

（訳文直訳：その思いが敢えて拒まれるのを見ました）’

・「見」+ 動詞 → xem[24] を使った意訳

(31) 漢: 交書見授［交書授けらる］<I:26b:8>

喃: 詞 交書 拵 朱 祜

tờ giao thư trao cho xem

類別詞 交書 授ける 使役 見る

‘交書（取り交わした約束を書いた紙）が授けられた。

（訳文直訳：交書は、授けて見せた）’

---

[23] 「於」等の一部の語との対応関係が強い語で（鷲澤 2016）、この場合も機械的に「於」を chưng に訳したと考えられる。

[24] 「見る」の意味だが、thấy が「目に入る」のニュアンスであるのに対して、xem はより自分で意識して見ることを指す。

このように助動詞「見」を訳す場合、訳文での thấy と動詞を用いた構文は安定せず、直訳的・機械的な訳され方も多く見られる。Phải や được の場合と異なり、「thấy + 動詞」という受身構文が 16 世紀のベトナム語にあったのではなく、直訳的に「見る」を意味する thấy を用いて訳したと考えるのが自然である。

５．結論および考察

本稿では 16 世紀に書かれた『新編傳奇漫録』全巻を対象に、ベトナム語で受身が助動詞的な語を用いてどのように表現されているかを調べた。結果をまとめると、次の表 1 のようになる。

表 1：『新編傳奇漫録』における phải, được, thấy を用いた受身表現の出現回数

	訳 + 動詞	追加 + 動詞	訳 + 動作主 + 動詞	追加 + 動作主 + 動詞	訳 + 動作主 + thửa + 動詞	訳 + 動詞 + chưng + 動作主	意訳など	合計
phải	8	17	10	5	23	0	0	63
được	24	19	1	1	0	0	0	45
thấy	21	0	0	0	0	1	3	25
合計	53	36	11	6	23	1	3	133

表中で、「訳」は漢文の中の「為」「被」「得」「見」等の語を phải、được、thấy に訳している場合を指し、「追加」は漢文の原文で対応する語がなく、訳文にて追加されている場合を指す。なお、được の行の中の灰色に塗った箇所は、訳文において受身と共通する構文が用いられているが、「得」や「獲」の訳語であるため、原文では受身の意味でなく、訳文でも受身と断定することはできない箇所である。また訳文で thấy が用いられている箇所は、原文では受身だが、ベトナム語において定着した受身表現と断定できず、表 1 では網掛けをした。

現代語で受身を表す bị は用いられておらず、主に phải と được によって表現されている。この 2 語は原文になくても追加される場合があることから、直訳的な表現として用いられたのではなく、ベトナム語の中で自然と用いられていた語と

捉えることができる。先行研究で述べられている、17 世紀の状況の前段階が表れている。

ただし、全巻の訳文部分の総字数が44,638字であることを考えると、受身表現の頻度は多いとは言えない。特に動作主を伴う表現は、頻度が少なくなり、助動詞ごとに表現方法も異なり、漢文からの直訳的な表現が多数であるため、表現方法として存在はしても、構文として定着していたと断定することはできない。また、現代語の bị や được に比べて、『新編傳奇漫録』における phải や được は動詞の前に用いられる場合のほかに、目的語としての名詞を伴う通常の動詞としての用法も多く見られるため、現代語ほど文法化が進んでいないということも観察できる。

受身の「見」に対応する thấy については、確かに少なくとも『新編傳奇漫録』の中で受身の助動詞と捉えても良いほどの頻度、用いられているが、原文の構図を維持せずに意訳している場合も多く見受けられる。先行研究において近い時代の他の資料で体系的な用法が報告されていないことからも、16 世紀ベトナム語における受身表現として定着していたとは言えず、『新編傳奇漫録』の中または漢文との対訳資料において「見」に直訳的に対応させられた語と捉えるのが自然である。

これらを通して、16 世紀のベトナム語では、機能語を用いた明示的な受身表現は、現代語のように確立されるまでの過程の初めの段階にあったと結論することができる。

今後、語順を変えることによる受身表現や、構文的に能動文と同じでも受身の意味になる場合など、機能語以外による表現も対象にすることで、より網羅的な受身表現の把握が可能となる。また、『新編傳奇漫録』以外の同時代の資料や、別の時代の資料も調べる必要がある。

［参考文献］

Đinh, Văn Đức (2018) *Tiếng Việt lịch sử trước thế kỷ XX: Những vấn đề quan yếu* [ベトナム語、20 世紀以前の歴史：いくつかの重要な問題]. Hà Nội: Nhầ xuất bản Đại học Quốc gia Hà Nội.

Hoàng, Đức Quảng et al. (フランス語訳) (1994), Nguyễn Dữ (漢文原文) *Truyền kỳ mạn lục: Vaste recueil de la transmission des merveilles*. Hà Nội: Nhà xuất bản Thế giới.

Hoàng, Thị Tuyền Linh et. al. (2011) *Từ điển tiếng Việt* [ベトナム語辞典]. Hà Nội, Đà Nẵng: Nhà xuất bản Đa Nẵng, Trung tâm Từ điển học.

川本邦衛（1999）『傳奇漫録刊本攷』慶應義塾大学言語文化研究所.

Nguyễn, Quang Hồng (翻音、註解) (2001) Nguyễn Dữ (漢文原作), Nguyễn Thế Nghi (字喃文訳) *Truyền kỳ mạn lục giải âm* [傳奇漫録解音] Hà Nội: Nhà xuất bản Khóa học Xã hội, Hà Nội.

Trần, Trọng Dương (2004). Bước đầu tìm hiểu cách dịch cấu trúc bị động trong *Truyền kỳ mạn lục giải âm*. [『傳奇漫録』中の受身構文の訳し方についての初歩研究] *Tạp chí Hán Nôm* [漢喃雑誌] 3 (64), tr. 34-39.

鷲澤拓也（2016）「漢文−チュノム・ベトナム語対訳資料『傳奇漫録』解音における固定的な訳と例外的な訳：『之』『於』『于』『夫』と虚詞 chưng を中心に」『東京大学言語学論集』37: 281-301.

Washizawa, Takuya (2018) Usage of the Grammatical Word Thửa in the Chinese-Old Vietnamese Bilingual Text Tân biên Truyền kỳ mạn lục and Comparison with Other Documents.『東京大学言語学論集』40: 275-293.

鷲澤拓也（2019）「ベトナム語の機能語 của, sự, không, bị の文法化過程：16〜19 世紀の文献から」『東京大学言語学論集』41: 367-392.